

JADS

JAPAN ART DOCUMENTATION SOCIETY

アート・ドキュメンテーション学会

JADS

アート・ドキュメンテーション学会

第17回（2024年度）秋季研究集会 予稿集

2024年12月1日(日)

東京富士美術館及びオンライン開催

アート・ドキュメンテーション学会 第17回 (2024年度) 秋季研究集会プログラム/目次

2024年12月1日(日)12時30分～16時40分 東京富士美術館及びオンライン開催

10時30分～11時30分

第82回見学会 東京富士美術館 見学

特別展 サムライ・アート展 一刀剣、印籠、武具甲冑、武者絵、合戦絵一

※ 現地参加のみ ※ 「サムライ・アート展」入口集合

12時30分～12時40分

開会挨拶 本間 友 (アート・ドキュメンテーション学会 幹事長)

12時40分～13時40分

萌芽研究発表 (発表10分 コメント5分 質疑5分)

12:40～13:00	石井 淳 「「アート番組」ドキュメンテーションの試み」	P4
13:00～13:20	小池 珠恵 「浮世絵の主題内容に着目したメタデータ構造化の試み」	P5
13:20～13:40	矢内 有紗 (早稲田大学文学研究科) 「劇団体制における舞台芸術アーカイブ活動の現状と課題」	P6

13時40分～14時

ポスター発表(オンサイト開催のみ)・休憩

大内 静華 (奈良国立博物館) 「奈良国立博物館 仏教美術資料研究センターの紹介」	P7
学会アーカイブ SIG (代表: 阿児雄之) 「JADS 活動年表の制作について」	
三谷 直哉 (国立文化財機構文化財防災センター) 「令和6年能登半島地震文化財レスキュー事業における、データ管理の取り組み」	

14時～15時30分

研究発表 (発表25分 質疑5分)

14:00～14:30	生田 真菜 (江戸東京たてもの園) 「収蔵資料を活用した江戸東京たてもの園鑑賞ナビの開発」	P8
14:30～15:00	大橋 正司、大坪 逸貴 (サイフォン合同会社)、白井 雅明 (小千谷市) 「図書館・博物館複合型文化施設における共創型デジタルアーカイブ構築の試み」	P10
15:00～15:30	本間 友 (慶應義塾ミュージアム・commons) 「修復ドキュメンテーションの構造分析」	P12

15時40分～16時25分

特別企画【座談会】この人に聞きたい—これからのコレクション・マネジメント

話題提供・進行: 鴨木年泰 (東京富士美術館)

コメンテーター: 朝倉芽生 (高知県立美術館)、中尾智行 (文化庁博物館振興室) [50音順]

16時25分～16時35分

萌芽研究賞

16時35分～16時40分

閉会挨拶 田良島 哲 (アート・ドキュメンテーション学会 会長)

アート・ドキュメンテーション学会 入会のご案内

P16

発表者プロフィール

萌芽研究発表

石井 淳 (いしい あつし)

フリーランス

2002年 奈良先端科学技術大学院大学 情報科学研究科博士前期課程修了(工学)。2018年までシステムインテグレーターにてIT基盤の設計・開発・運用に従事。ITIL v3 Expert, 情報処理技術者試験システム監査合格など。2022年 慶應義塾大学文学研究科修了(図書館・情報学)。情報と運用(標準化・組織化・ドキュメンテーション)、メディアとリテラシーの関係に関心を持つ。

小池 珠恵 (こいけ たまえ)

筑波大学 人間総合科学研究群 人間総合科学研究科 情報学学位プログラム 博士前期課程

2024年、筑波大学 情報学群 知識情報・図書館学類 知識情報システム主専攻卒業。図書館情報学、浮世絵、メタデータ構造化に関心を持つ。

矢内 有紗 (やない ありさ)

早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程

演劇研究(文学修士)、劇作家、俳優、舞台制作。1960~80年代の現代日本演劇を専門とし、現在は寺山修司作品のメディア横断的な研究を行う。2018年より月蝕歌劇団、新宿梁山泊、Project Nyxなどのアングラ劇団で演劇経験を積む。2022年、『酒乱お雪』(北海道戯曲賞優秀作)を上演し、劇作家デビュー。現在は早稲田大学演劇博物館に勤務し、舞台芸術アーカイブの人材育成事業に従事する。

ポスター発表

大内 静華 (おおうち しずか)

奈良国立博物館 学芸部資料室アソシエイトフェロー

奈良大学文学部文化財学科卒業。立命館大学学芸図書館業務委託職員、京都ノートルダム女子大学図書館情報センター事務職員(司書)、東北大学附属図書館工学分館事務補佐員などを経て、2023年4月より現職。図書担当のアソシエイトフェローとして司書職に従事。文献資料の収集や閲覧・レファレンスなど、奈良国立博物館 仏教美術資料研究センターにおける幅広い業務を担当している。NPO 法人書物の歴史と保存修復に関する研究会会員。

JADS Archives and Archival Methods SIG (学会アーカイブ SIG)

ひと月に一回のペースで、アート・ドキュメンテーション学会における学会アーカイブの在り方等を検討する「会合(参加はJADS会員限定)」と、広く学協会のアーカイブ等をテーマとして学ぶ「勉強会」を開催しています。JADS会員に限らず、どなたでも参加可能な勉強会の開催記録や予定は、SIGのウェブサイトをご覧ください。

<https://sites.google.com/view/jads-aam-sig/>

阿見 雄之 (あこ たかゆき)

東京国立博物館情報管理室長、館史資料室長/文化財活用センターデジタル資源担当室長

東京工業大学大学院修了。博士(学術)。東京工業大学博物館講師などを経て、2018年10月から現職。専門は博物館情報学、文化財科学。主な著作に「収蔵品情報の集約と展開を目指す際のデジタルアーカイブ編成」『デジタル時代のコレクション論』(勉誠社、2024)、「東京国立博物館における情報連携事例から見るミュージアム情報の流通」『ミュージアム・ライブ

ラリとミュージアム・アーカイブズ』(樹村房、2023)、「デジタルアーカイブと展示」『展示学事典』(丸善出版、2019)他。

三谷 直哉 (みたに なおや)

国立文化財機構文化財防災センター 研究員

同志社大学文学部文化学科国文学専攻卒業。IT関連企業でのシステムエンジニアを経て、2023年から現職。2024年デジタルアーキビスト資格(特定非営利活動法人日本デジタルアーキビスト資格認定機構)を取得。専門は文化財情報、文化財防災、国文学。

研究発表

生田 真菜 (いくた まな)

江戸東京たてもの園学芸員

日本女子大学大学院家政学研究所住居学専攻修了。2022年から現職に就き、園内に蓄積された資料のデジタル化および「江戸東京たてもの園鑑賞ナビ」や特別展に従事している。専門は日本建築史および日本美術史。2021年日本建築学会大会で発表歴あり(「大崎八幡宮の造営に関する研究—絵師と工匠にみる背景について—」『日本建築学会大会公園梗概集(東海)』2021年9月)。

大橋 正司 (おおはし しょうじ)

サイフォン合同会社 代表社員、IA

東京大学大学院情報学環・学際情報学府修士課程修了。BtoCサービスから業務システムまで、サービスデザインを幅広く手掛ける。近年はデジタルアーカイブ関連の情報設計にも従事。

大坪 逸貴 (おおつぼ いつき)

サイフォン合同会社 アーキビスト、IA

武蔵野美術大学卒業。武蔵野美術大学 美術館・図書館でデジタルアーカイブのメタデータ設計、システム企画、資料登録管理等を包括的に担当。2021年よりサイフォンに在籍。アーカイブ機関の情報環境設計や、WEBサイト情報設計に取り組んでいる。近年の主な実績に「中村とうようコレクションデータベース 地球が回る音」「とうようズ・レガシー」、ジャパネットのコンテンツ企画・制作などがある。

白井 雅明 (しらい まさあき)

小千谷市 にぎわい交流課 主査、学芸員

東海大学文学部歴史学科考古学専攻卒業。小学生の頃より自宅周辺にある遺跡にて出土する石器に興味を持ち、大人達や地域の学芸員から学びながら現在に至るまで考古学の学習・研究を続ける。民間遺跡発掘会社にて、新潟県域を中心として諸開発に伴う発掘調査に従事。2020年より現職に従事。文化財調査のほか、小千谷市内各地における歴史講座を年間50回程度行っており、地域固有の歴史を地域の住民と楽しみながら共に学んでいる。

本間 友 (ほんま ゆう)

現職：慶應義塾ミュージアム・コモンズ 専任講師

慶應義塾大学大学院(美学美術史学)修了後、同大学アート・センターにて展覧会の企画、アーカイブの運営、地域連携プロジェクトの立案を行う。2019年より現職。アート・ドキュメンテーション、美術史、博物館学、アーカイブを専門とする。主な著作に、「ミュージアムのコレクション：アクセスとドキュメンテーション」『デジタルアーカイブベシックス』(勉誠社、2024年)、「修復記録に触れる—修復ドキュメンテーションの共有化」『記録集 我に触れよ(Tangite me)：コロナ時代に修復を考える』(慶應義塾ミュージアム・コモンズ、2022年)など。

「アート番組」ドキュメンテーションの試み

A study and development for the documentation of the TV Programs on Art.

石井 淳*

Atsushi Ishii

Resume:

アート番組は、展覧会を含むアートに関する幅広い情報を得るメディアの一つである。近年、デジタル化を核とした技術の進展に伴い、テレビ番組そのものの映像「資料」としての潜在的な実用性が高まっている。しかし、現状、映像資料として有効的・効率的に活用するための前提となるメタデータに関しては、十分な供給やデザインがなされているとは言い難い。本発表では、アート番組およびそのメタデータに関する現況を整理しつつ、アート番組に／アート番組として、一般市民の視点から期待されるメタデータの素案（イメージ）を、いくつかの代表的番組の内容分析を交えつつ提示する。

1. アートの普及・受容・利活用とテレビ番組

アートの普及・受容・利活用においてテレビ番組は無視できない影響力や固有の魅力を持っており、それがアーカイブとして供されることの意義は、既に30年以上前に提言されている（波多野宏之, 1993）¹。そして近年、デジタル技術の進展に伴い、録画・保存・編集がより容易となり、あるいは、オンデマンドでの視聴が普及拡大し、映像「資料」（あるいは視聴覚資料、映像アーカイブとも）としての実用性は潜在的に一層高まっている。しかし、現状、その前提となるメタデータに関しては、十分な供給とデザインがなされているとは言い難い。

2. 活動の目的・目標・方針

発表者は、現代社会における展覧会を一つの巨大で複合的なメディアと捉え、受容する一般市民の視点から有用な情報モデルと可能な情報資源組織化のあり方を考究している。そして本取り組みはその一環として手掛けるものである。この立場から、対象テレビ番組（以降カッコ付けで「アート番組」と記す）を以下のように定め、そのメタデータの設計と構築を試みる。

「展覧会が一定程度以上の割合（時間・内容・放送頻度等。詳細は別途検討定義）で取り上げられるテレビ番組」

ただし、これは最低限／最大範囲の定義であり、活動の進め方としては、現実的なコスト・制約・便益を確かめつつ優先度を設定し、段階的に範囲を拡張するアプローチを取る。



図1 段階的対象範囲拡張のイメージ

3. メタデータの設計と構築について

現在、幾つかの代表的「アート番組」を対象に、メタデータの試作（データ設計とレコード構築）を試みており、今回その方法論的検討も含め提示する。「通信と放送の融合」という言葉に象徴されるように、情報資源としては取り扱いが難しいタイミングではあるが、識者の皆様のご指摘・ご助言を賜りたい。

¹ 波多野宏之『画像ドキュメンテーションの世界』勁草書房, 1993年

*いしい あつし（フリーランス）。

浮世絵の主題内容に着目したメタデータ構造化の試み

An Attempt to Structure Metadata Focusing on Ukiyo-e Subject Contents

小池 珠恵*, 高久 雅生**

KOIKE, Tamae TAKAKU, Masao

Resume:

本研究は、浮世絵の内容に基づく効果的な検索システムの構築を目的としている。現状、浮世絵には内容面のメタデータが不足していることが多く、主題内容に基づく検索が困難である。そこで、浮世絵の主題内容に焦点を当てたメタデータ構造を開発し、初学者でも理解しやすい主題検索の提供を目指す。名所絵 30 枚を対象に、考案した項目に基づくメタデータの付与を試み、項目の妥当性と設定規則、語彙の体系化について検討を行った。本稿では、開発したメタデータ構造の有用性について議論する。

1. はじめに

浮世絵の主題¹検索は、作品タイトルや作者名を知らない初学者にとって、多数の作品の中から、興味を惹かれるものを自力で発見する手段となりうる。しかし、浮世絵の主題がメタデータとして付与されたオンラインデータベースは少なく、主題検索は困難である。そこで、本研究では、初学者の主題検索に適したメタデータ構造を明らかにすることを目的とする。主題検索を可能とするため、①多くの作品に値を付与できる②複数の作品が共通の値を持つという 2 つの方針に沿って主題項目を設定する。加えて、対象が初学者であること、複数人の非専門家がメタデータ記述を行うことを想定し、③初学者のもつ知識と関連する④非専門家が絵とタイトルの情報で記述できる主題を選択する。さらに、浮世絵が⑤江戸の生活文化の学習に用いられるという点に着目し、これに応用できるメタデータの作成を目指す。

2. 方法

方針⑤を考慮し、対象を江戸時代の名所絵に限定した。ジャパンサーチのテーマ別検索機能「名所絵について調べます」を使用し、江戸時代に出版された名所絵で、重複のない 30 件を抽出した。これらの作品について、方針①-⑤に沿い、取り上げる主題項目を設定した。項目に対する各作品の主題内容を筆頭著者自身が記述した。

3. 結果、考察、まとめ

設定した項目名を以下に示す。項目名に続く括弧内の数値は、その項目に値を記述できた作品数、

その項目で記述できた値の異なり数、複数の作品で共通して記述された値(共通要素)の異なり数を示す。

都道府県(30/4/3), 国・都市(30/4/2), 人数(30/9/6), 性別(23/4/3), 場所-抽象(28/8/7), 建造物(23/21/8), 地名(23/22/1), 持ち物(20/18/6), 町名(19/17/2), 川(19/4/1), 年齢(16/2/2), 乗り物(13/2/1), 植物(13/7/4), 職業(12/7/1), 山(9/4/1), 季節(8/4/3), 天気(7/4/2), 動物(7/5/1), 時間帯(5/3/1), その他自然(5/4/2), 行事(4/4/0), 市町村(3/3/0), 食べ物(3/5/1)

値を記述できた作品数は最大 30 件、最小 3 件となった。共通要素を持った項目は「行事」と「市町村」以外の全てであり、主題検索に利用できると考えられる。また、共通要素を調べることで、名所絵に頻繁に描かれる主題を分析できる可能性がある。さらに、値の異なり数が小さい項目は語彙を統制しやすいが、異なり数が大きい項目の語彙は、体系化の検討を要すると考えられる。

方針③は、現代と共通する概念を項目に設定したため、実現可能と考えられる。しかし、方針④に合わせた結果、江戸時代の文化に直接関わる内容が地名や持ち物以外に含まれなかったため、方針⑤の実現が難しいと考えられる。今後は専門家がデータ記述を行うことも想定し、項目を検討したい。

今後はより多くの名所絵のメタデータ付与を進め、メタデータ構造を確定し、主題検索機能と閲覧機能を備えたアプリケーションを開発したい。

¹ 本稿では絵に描かれた各部分の概念・名称を指す。

*こいけ たまえ (筑波大学 人間総合科学研究群 人間総合科学研究科 情報学学位プログラム 博士前期課程)

** たかく まさお (筑波大学 図書館情報メディア系)

劇団体制における舞台芸術アーカイブ活動の現状と課題

Current Status and Issues of Performing Arts Archives in the Theater Company System

矢内 有紗*

YANAI, Arisa

Resume:

演劇活動において劇団組織では、メンバーの流動性やアーカイブ専門係の不在などの理由から、体系的なアーカイブ活動が難しい。本発表では1980年代に発足し「小劇場ブーム」を牽引した劇団「月蝕歌劇団」を事例に挙げ、聞き取り調査やフィールドワークを通じて、劇団組織における舞台芸術アーカイブの現状と課題、今後の展望を報告する。

1. 劇団体制下におけるアーカイブの現状

1.1 起点

1980年代以降、舞台公演の記録は、特に映像資料の面において充実化が見られた。当劇団も映像をはじめとし膨大な記録資料を保持していたが、長らく放置状態であった。しかし、劇作・演出を兼ねる主宰者の死後、劇団存続そのものが危ぶまれた際、再演や新たな創作活動のために、過去の公演資料が必要とされる場面がしばしば発生した。

1.2 資料の保存状態

当劇団では、1980年代の初演以降、舞台公演を記録した映像資料や写真が大量に保存されており、そのほとんどが販売用にパッケージ化されたものである。加えて、舞台公演制作のプロセスを記録したメイキング映像も、劇団会員やファン向けに提供されており、今日では貴重な資料として再評価に値する。このように収益化目的や、ファン層の投資により比較的早い段階から記録媒体の作成が実施されていたため、結果として多くの公演資料が保存されることとなった。

また、詳細不明の資料に直面した際、現在は第一線を退いているが長年活動を支えてきた制作メンバーと連絡が取れることは、アーカイブ作業を進める上で大きな利点であった。特に、その中の一人がVHSを良好な状態で保管し、DVDに変換して保持していた事例もあった。当劇団のスタッフは基本的に熱心なファンで構成されており、資料を容易に捨てられない姿勢が、長年の保存につ

ながったという。こうした個々人の熱意による緩やかなネットワークは小劇団ならではの特徴であり、ファンとしての情熱がアーカイブ活動を自然と支えてきたと言える。

2. 課題

第一に、資料の多くが個人所有であることから散逸のリスクが高く、複数の関係者から情報を集める必要がある。さらにその多くが口頭情報に依存しており、特に劇団の存続期間が長くなるほど、「いつ、どのように記録されたものか」を確認するためには当時を知る関係者の証言が不可欠である。また、アーカイブ作業が特定の個人に依存しがちで、その人物が劇団を離れた場合、作業が停滞してしまう懸念がある。これらの課題は、アーカイブ活動が持続可能な形で行われるための大きな壁となっている。

3. 今後の展望

EPAD(舞台芸術アーカイブ+デジタルシアター化支援事業)の発足により、貴重な舞台公演資料を提供することで収益を得られるようになった。当劇団では1980年代から2000年代の映像5件、戯曲1件、ポスター1件がデジタルアーカイブ化され、ネット上で検索・閲覧が可能である。劇団は持続性が不透明なアート組織であるため、アーカイブ活動には困難が伴うが、コロナ禍を経て記録の重要性は認識されつつある。アーカイブは時代性や社会の動きなど多様な要素の保存に繋がり、特に1980年代発足の当劇団の資料は文化や社会情勢の記録として期待されている。

*やない ありさ (早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程)

13時40分～14時

ポスター発表

大内 静華（奈良国立博物館）

「奈良国立博物館 仏教美術資料研究センターの紹介」

仏教美術資料研究センターは、奈良国立博物館の調査・研究活動の中で蓄積された仏教を中心とする美術や歴史に関する学術資料を作成・収集・整理・保管し、公開することを目的として、昭和55年に設置され平成元年5月に開館した。建物は旧奈良県物産陳列所（設計：関野貞）で、昭和58年に重要文化財の指定を受けている。

図書や雑誌を所蔵している以外に、当館での展覧会（正倉院展を除く）や文化財の調査時に撮影した写真資料を、台紙（B5サイズ）に紙焼写真を貼付した写真カードと「画像データベース」によって公開している。また、日本美術院が明治32年から昭和19年におこなった仏像彫刻を中心とする文化財の修理記録を公開する「日本美術院彫刻等修理記録データベース」は、インターネット上で検索や目録情報が閲覧でき、画像は館内でのみ見ることができる。さらに、「ガラス乾板データベース」では、当館の開館（明治28年）から昭和40年代までに撮影されたガラス乾板の画像が館内限定で検索や閲覧が可能である。そして、「奈良国立博物館リポジトリ」では研究紀要『鹿園雑集』などの研究成果を公開している。

本発表では、こうしたセンターの活動について紹介したい。

学会アーカイブ SIG（代表：阿児雄之）

「JADS 活動年表の制作について」

学会アーカイブ SIG では、JADS の活動変遷を知ることができる「活動年表」と、学会活動に伴って作成されてきた文書等の種別を見渡すことができる「見取り図」の整備をおこってきた。これらは、JADS 役員会・事務局や会員の手元にある資料群を、学会アーカイブとして受け入れ、整理する時に役立つものであろう。

現在、当 SIG にて制作している「活動年表」は、学会創立20周年記念の際に編集された「アート・ドキュメンテーション年表」を下地として、2009年度以降の活動を追記している。編集当時から15年が経過し、この間には秋季研究集会などの新たな活動が生まれている。これら活動について、『通信』にて報告されている記事を出典として、追記をおこなっている。追記作業は、月1回のペースで開催している SIG の会合（オンライン）の場で、参加者同士での議論を交えつつ実施している。限られた時間であるが、互いに会話しつつ共同編集することによって、『通信』誌面では読み取れない活動当時の様子のお話に花が咲くなど、オーラルヒストリー的な側面も垣間見えている。是非、多くの方々に、活動年表制作に携わっていただければ幸いである。

三谷 直哉（国立文化財機構文化財防災センター）

「令和6年能登半島地震文化財レスキュー事業における、データ管理の取り組み」

令和6年能登半島地震の発生を受け、能登半島地震被災文化財等救援委員会（以下、救援委員会）を組織し、動産文化財等を対象に、損壊建物から救出、安全な場所へ一時保管を実施する被災文化財等救援事業（以下、文化財レスキュー事業）が実施されている。救援委員会は、文化財に関わる28団体からなる会議体である文化遺産防災ネットワーク推進会議の参画団体により構成され、文化財防災センターが事務局を務めている。また、文化財レスキュー事業には、救援委員会とともに、石川県内の文化財保護行政の関係者、いしかわ史料ネットや石川考古学研究会等の任意団体も関わっている。

文化財レスキュー事業では、救出計画立案や救出活動を行うために多くの情報が必要で、その内容は文化財等の所有者の氏名・住所・連絡先や、現場の写真、業務マニュアル等、多岐にわたる。情報の共有範囲にはいくつか段階があり、最も狭い範囲では事務局内、最も広い範囲では救援委員会内と非常に広がりがある。本発表では、文化財レスキュー事業において、組織間を跨ぎ適切にデータを共有できるよう、データの管理方法を検討し実践した事例を報告する。

収蔵資料を活用した江戸東京たても園鑑賞ナビの開発

Development of application using Edo Tokyo Open Air Architectural Museum
Map&Guide

生田 真菜*
IKUTA, Mana

Resume:

Web アプリ「江戸東京たても園鑑賞ナビ」は、来園者の利便性向上に加え、各復元建造物の調査および研究情報公開の場とすることを目的とした。そこで移築時から蓄積してきた資料整理を行うとともに、関連する新聞記事の収集も行った。以上の整理により、資料のデジタル化を促進することができた。本稿では、本アプリの内容と、開発にあたり実施した資料整理について報告する。

1. はじめに

江戸東京たても園は、1993年（平成5）に江戸東京博物館の分館として開設された。敷地面積7haの園内には現地保存が困難な文化的価値の高い30棟の復元建造物を移築しており、復元・保存・展示するとともに、貴重な文化遺産として次代に継承することを目指している。来園者の客層は子供から高齢者まで幅広く、また車いす利用者や乳幼児連れや外国人旅行者など状況も様々である。多様な来園者の声を運営に活かすために園内で実施しているアンケートでは、以前から順路や水回りなどの設備の場所に関する声や、音声ガイドを求める声があった。これらの声に応えるため、園内鑑賞補助のアプリケーション「江戸東京たても園鑑賞ナビ」（以下、本アプリ）を東京都が推進する「TOKYO スマート・カルチャー・プロジェクト」の一環として開発し、今年4月25日にリリースした（図1）。開発にあたり、令和4年度に園内のWi-Fiの敷設整備と、復元建造物の資料整理としてデジタル化を行った。特に資料整理はアプリ内の解説に大いに活かされた。そこで本稿では、本アプリの内容とともに、開発にあたり実施した資料整理について報告する。

2. 江戸東京たても園鑑賞ナビの内容

本アプリはWebアプリケーションで、園内で配布しているカード・チラシ・ポスターに掲載している二次元コード、当園のウェブサイト、検索ブラウザでの検索によりアクセスすることができ

る。その機能は、1)園内マップの表示、2)収蔵している復元建造物全30棟のテキストと古写真による解説およびAI音声による読み上げ、3)ARマーカーにより起動できるAR機能の3つである。

1)園内マップの表示機能

初回アクセス時には歩きスマホの注意喚起などのポップアップが表示され、その後受付のあるビジターセンターが中心になるように園内マップが表示される。園内マップは復元建造物だけでなく、飲食店やお手洗いなどの設備もアイコンにより表示されている。また、画面左下にある車いすマークでバリアフリー情報の表示切替ができるようになっている。バリアフリー情報を表示すると、段差と傾斜、車いす導線、スロープの場所がマークで表示される（図2）。

2)復元建造物の解説機能

ほとんどの復元建造物の中は、情景再現展示として家具や道具類を展示しているが、景観を損なわせることになるため、そのひとつひとつにキャプションは付けていない。また、各復元建造物の入り口に建造物の平面図とともに旧所在地などの概要を説明する解説パネルを設置しているが、特に旧所在地にあった頃の商売や生活については十分な解説内容とは言えない。そこで、本アプリでは建造物内に展示している道具類や商店や人が住んでいた頃の様子が見えるような内容を中心に紹介している（図3）。解説文の作成にあたり、後述する資料整理で所在を再確認した旧所有者への聞き取り調査や、古写真を多く取り入れ、

*いくた まな（江戸東京たても園学芸員）。

現在と旧所在地にあった頃の建造物の様子を見比べることができるようにした。

3) AR 機能

AR 機能は、綱島家(農家)・常盤台写真場・田園調布の家(大川邸)・旧自証院霊屋・大和屋本店(乾物屋)・丸二商店(荒物屋)の6棟に設置したARマーカーを、本アプリをARモードにしたうえでスマートフォンのカメラをかざすことにより起動する。起動後にARの内容に関連した解説をテキストとAI音声で見聞きすることができる(図4)。

3. 復元建造物の資料整理と資料収集

たてもの園では、復元建造物30棟それぞれの移築、情景再現展示、公開後の教育普及活動、補修工事に関する資料を蓄積している。普段はレファレンス対応やミュージアムトークの資料作成などのために、主に各復元建造物の担当学芸員が扱うことが多い。そのため資料の内容や所在などについての状況は復元建造物の各担当者でないと把握しきれない状態だった。そこで本アプリを開発するにあたり、それらの資料を移築前・解体時・復元工事時・情景再現展示関連・文献資料・広報および印刷物に大きく分けてExcel上で一覧を作成し、すべての職員が資料の所在と資料収集の状況が分かるように整えた。資料の中には、カセットテープ、MD、VHS、Hi8、フロッピーディスクが含まれており、これらのデジタル化も同時期に行った。上記の記録メディアには、聞き取り調査時の音声や、移築前の調査と解体および移築工事の様子や上棟式などの催事を記録した映像であることが確認できた。中にはたてもの園を取材したテレビ番組の映像もあり、復元建造物のみならず、開園当初の園内の様子が分かるたてもの園の記録も残されていた。また、同時に主要新聞社3社のオンラインデータベースを中心に、園内の復元建造物と当園の前身施設である武蔵野郷土館に関連した新聞記事の収集を行った。この収集によってビジターセンター(旧光華殿)の移築の経緯や年代を改めて精査することができた。

以上の資料整理により、当園の前身施設が移築を行った6棟の復元建造物を中心に、関連の文献資料などが少ない状況を把握することができた。

4. 今後の展望

現在もより完成度の高いアプリを目指して開発を継続しており、今年度中に更新予定だ。その内容は、アプリに関するアンケート機能、都電などの音が出る展示物の音声の追加、また、屋外展示物の解説を予定している。

一方資料収集については、資料の少ない復元建造物を中心に、査読論文や文献資料の収集を進めている。加えて、半年に1度の頻度で新聞記事の収集を行っている。今後も引き続き資料収集を行い、本アプリなどで公開する一助にしたい。



図1 たてもの園ナビ
トップ画面



図2 マップ画面バリアフリー
情報表示している様子



図3 花市生花店の解説画面



図4 霊屋のAR画面
(赤枠AR出現箇所)

図書館・博物館機能複合型文化施設における 情報環境設計と共創型デジタルアーカイブ構築の試み

Attempts at Information Environment Design and Collaborative Digital Archive Development in a Library-Museum Multifunctional Cultural Facility

大橋正司*、大坪逸貴*、白井雅明**

OHASHI Shoji, OTSUBO Itsuki, SHIRAI Masaaki

Resume:

図書資料・博物資料・市民の活動など多様な「情報」を扱う複合型文化施設において QR コードを介して物理的空間と情報空間をシームレスな接続を可能にする Web サービスを開発した。収蔵品管理システムを兼ねるデジタルアーカイブと図書館システム、利用者投稿サービスを連携し、各データベースの収録コンテンツでキュレーションを行う機能を備えている。本機能による展覧会での収蔵品情報活用の試験的な実践と、市民参加でのアーカイブ構築の計画を紹介する。

1. はじめに

新潟県小千谷市で 2024 年 9 月に開館した「小千谷市ひと・まち・文化共創拠点 ホントカ。」は図書館を軸として、博物館機能・集客機能・アプリケーション施設などを備える多機能複合文化施設である。本施設における情報環境設計では、物理的空間（建築・地域・所蔵資料など）と情報空間（デジタルサービス）を接続し一体的に捉えることで、館内外における新たな情報探索の体験や情報発信のあり方を創出することを目指して整備を進めてきた。

このような複合施設では筆者らが報告した高知県佐川町の事例¹⁾にも見られる「地域資料」の概念の再考により、物理的な資料に加えて市民参加での地域のひと・もの・ことに関する情報の収集・保存が企図される。また、図書資料・博物資料・美術資料など多様な分類の資料を扱う場において、それらを相互に関連づけて提供するためのしくみを設計することが求められる。

本稿では、利用者投稿サービスと収蔵品情報を収録するデジタルアーカイブを連携し、そうした情報環境を実現するシステムについて、具体的な機能や実装、運用の工夫を紹介する。

2. システムについて

2.1 利用者サービス「コトノハ」

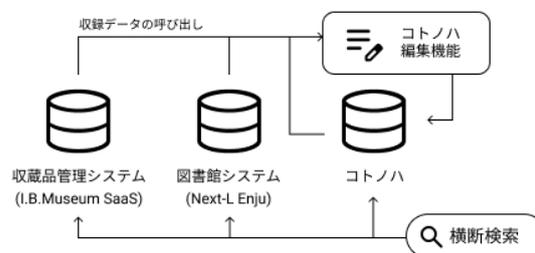
本計画のコンセプトを実現するためのツールとして、新たに開発したサービスが「コトノハ」である。(2024 年 12 月正式リリース予定) コト

ノハは、デジタルの情報に物理的な媒体を与え、館内外で資料と情報、あるいは資料同士の関連づけを行うことを可能にする。概要は以下の通りである。

- 1) 利用者はホントカ。の公式 Web サイトのマイページでコンテンツを作成・公開²⁾できる。
- 2) 公開ページに紐づく QR コードを発行・印刷して葉や POP、キャプション型の台紙に添付し、館内外に自由に置くことができる。(蔵書に挟む、書架に掲示する、展示資料に添えるなど)

このサービスには①ブックリスト作成、②HTML 要素の自由な組み合わせによるページ作成、③画像・コメントなどのリアクション投稿募集の 3 種類の編集機能があり、②③は市民による地域情報の投稿という観点から広義のデジタルアーカイブとしての用途も期待される。

2.2 全体構成図



図表 1 システム構成図

今回開発したシステムの特徴は、蔵書管理用の図書館システム、博物館向け収蔵品管理システム

*おおはし しょうじ、*おおつぼ いつき (サイフォン合同会社)、**しらい まさあき (小千谷市)

(デジタルアーカイブ)、利用者サービス(コトノハ)を連携し、そのすべてを横断検索の対象とする点である。コトノハでは連携システム上の書誌情報・収蔵品情報・既存のコトノハのコンテンツを利用したキュレーションが可能である。

3. デジタルアーカイブの構築と利活用

3.1 2種類のデジタルアーカイブ

前述のシステム開発と並行して、小千谷市では2種類のデジタルアーカイブ構築を進めている。

- 1) 「おぢやの遺伝子」: 専門家が内容を精査し、市の収蔵品、または市内の個人・団体蔵の文化財で市がデータを管理するものを収録対象とする。
- 2) 「おぢやの千の宝」: 市民との共創により地域情報や評価の定まらない個人蔵資料、過去の展覧会情報など多様な情報を収録する。

前者はクラウド型収蔵品管理システム(I. B. Museum SaaS)³を利用し、2024年9月27日に公開⁴。今後、段階的にメタデータと画像の整備を進めていく計画である。後者はコトノハのシステム上で構築中である。

3.2 コトノハによる収蔵品情報の活用

小千谷市では企画展示「小千谷のDNAと千の宝」(会期: 2024年9月28日~2025年1月31日)において、資料画像やメタデータなどと詳細な解説や関連情報を併せて構成したコトノハを作成し、キャプションとして設置することを試みている。現在は正式提供開始前で、デジタルアーカイブの収録コンテンツも限定的なため、正式リリース後を想定して試験的に運用している。

デジタルアーカイブの情報をQRコードによって展示室で展開する試みとしては、東京富士美術館⁵をはじめとした先行事例がある。今回の試みではQRコードに紐づくWebページがキュレーションされており、資料とのかけ合わせでそれを取

り巻く文脈を伝えることができるのが利点であると考え。とりわけ、まちづくりの拠点として地域性を重視する本施設において、資料は美的鑑賞価値のある「もの」としてだけでなく、過去・現在の地域のひと・もの・ことについての情報と関連づけて示すことが求められる。

たとえば今後デジタルアーカイブの収録対象となる小千谷市特有の民俗資料「絵紙」(浮世絵を数点つなぎ、掛軸に仕立てたもの。小千谷絵紙保存会所蔵)⁶では、有形文化財の資料としての掛軸のほか、無形文化財の「小千谷の雛祭りにおける絵紙飾りの習俗」、江戸との交易路の途上にある地理的な要因、織物産業がもたらした経済的繁栄という歴史的背景、表具店の職人の手仕事、現在も毎年市内のさまざまな場所で開催される「ひいな祭り」、同種の資料(屏風仕立ても存在する)など、さまざまな要素を複合的に表現することで、来館者が資料を介して地域についての理解を深めることが期待される。

4. おわりに

小千谷市のデジタルアーカイブは現時点で運用を開始した段階にあるが、今後これらを活用した市民との協働によるアーカイブ活動を計画している。そこでは、コトノハにより市民から寄せられた資料や公開中の資料についての追加情報を、原資料の寄贈依頼も視野に入れて「おぢやの遺伝子」に収録していくことや、ワークショップなどでのメタデータ拡充が考えられる。(民具の用途や写真の撮影地、寸法、解説など、市民参加を受け入れやすい未入力項目を含めた設計を採用している)機関がつくるアーカイブと市民がつくるアーカイブを両輪で展開し、より地域に根ざしたデジタルアーカイブ構築と利活用のサイクルを生み出すことを目指したい。

1 大坪逸貴、大橋正司、飯塚重善「人間中心設計の考え方を取り入れたデジタルアーカイブのデザイン」『アート・ドキュメンテーション研究』第32号(2024年5月), pp.65-70

2 施設職員の確認・承認後の公開となるほか、権利処理などにおいて公共施設が利用者投稿サービスを運用するにあたってのリスクヘッジを十分に行った機能設計を採用している。

3 I. B. Museum SaaS, <https://www.waseda.co.jp/products/saas/>, (Accessed 2024-10-31)

4 おぢやの遺伝子, https://jmapps.ne.jp/ojiya_archive/, (Accessed 2024-10-31)

5 鴨木年泰, 「デジタルアーカイブ」「ミュージアムDX」のゴールの先にあるものーミュージアムの活動領域の拡張を目指して, <https://artscape.jp/article/9738/>, (Accessed 2024-10-31)

6 小千谷絵紙保存会, <https://ojiyaegami6.wixsite.com/egami>, (Accessed 2024-10-31)

修復報告書の所在と構造の分析：修復ドキュメンテーション共有化のための試論

The location and structure of conservation reports:
a pilot study for sharing conservation documentation

本間 友*
HOMMA, Yu

Resume:

近年、国内外において、芸術作品の保存・修復活動の過程で得られる情報を収集・記録化した「修復ドキュメンテーション¹⁾」を専門家や社会に対して共有することの必要性と潜在的価値が議論されているが²⁾、実際の共有は必ずしも進展していない。本発表では、修復ドキュメンテーション共有化のための試論として、修復ドキュメンテーションのうち修復報告書に焦点を当て、その所在と種類を確認するとともに、修復報告書の構成、記述内容、記述形式を分析する。

1. 修復報告書の所在と種類

近年の修復をめぐる大きな動きに、文化財の持続可能な保存・継承体制の構築を図ることを目的とする「文化の匠プロジェクト」(文化庁、2022～)がある。このプロジェクトの一環として東京文化財研究所(以下東文研)は「過去の修理報告書をデータベース化し、参照性の高いアーカイブ機能を実装」するための調査研究を進め、文化財保護行政との関わりの中で修復報告書がどこに・どのように蓄積されてきたのかを整理している³⁾。

日本において修復報告書が本格的に作成・蓄積されるようになったのは、明治時代からである。「古社寺保存法」(1897)により、国宝の修復に対する補助金交付が可能となり、以後、同法を引き継いだ「国宝保存法」(1929)、「文化財保護法」(1950)の元で、国宝および重要文化財の修復の大多数が、所蔵者/管理者、修復家/工房、補助金を交付し監督・助言を行う行政、という三者の関わりの中で進められている。

修復家が作成する修復報告書には標準化された形式はない。しかし、彫刻分野では、1898年に岡倉天心が日本美術院内に設けた修理部門が、設立当時より修復作業の記録法を定め記録の管理を行っていた⁴⁾。また、「在外日本古美術品保存修復協力事業」(東文研等、1991～)をきっかけに、修復家が用いる記録形式についての情報共有が行われるようになった。

現在、日本で作成されている修復報告書の種類は、大きく分けると四種類あり、四のステイクホ

ールダがそれぞれを保管していると考えられるが【表1】、これらの修復報告書の統一的な所在把握は行われておらず、保管者の枠組みを超えた活用や長期保存は実現していない。前述した東文研のプロジェクトでは、この課題に対して、国宝・重要文化財の修復事業の「修理事業DB」と個別事業の修復報告書や記録写真を蓄積する「修理記録DB」の構築が進められている。

- | |
|---|
| <p>① 公開された修復事業報告書: 所蔵者、修復家、事業補助者等によって公開された報告書[保管者:A, B, C, D]</p> <p>② 研究報告: 学会誌や専門研究誌などで発表される、学術的な観点から修復作業を論じた論考・報告[保管者:A, B, C, D]</p> <p>③ 修理報告書(外部者向け): 事業補助者に提出される修復報告書[保管者:A, B, C]</p> <p>④ 修復報告書(内部者向け): 修復家と所蔵者の間で共有される修復報告書[保管者:A, B]</p> |
|---|

*保管者凡例:A. 所蔵者/管理者 B. 修復家 C. 監督・補助機関(行政・助成財団など) D. 図書館・研究機関

表1

2. 多様な修復活動：修復報告書の試験調査

これまで確認してきたイニシアティブは、国宝・重要文化財の修復活動を対象としている。しかし勿論、修復活動は多様な作品に対して実施されている。例えば、発表者の所属する慶應義塾大学では、美術館だけではなく、図書館やアーカイブ等の組織が、幅広い種類の作品に対して様々なレベルでの修復活動を行っている。しかし、このような中小規模の修復活動やドキュメンテーションの多くは組織の内部に留まる傾向があり、実態の把握が困難である。

*ほんま ゆう (慶應義塾ミュージアム・コモンズ)

そこで次項では、多様な修復活動に対して作成されている修復報告書の実態を掴むため、慶應義塾大学アート・センター（以下 KUAC）が蓄積する修復報告書を対象に行った試験調査と分析の所見を報告する。KUAC は、全学組織「美術品管理運用委員会」の事務局として、慶應義塾の美術作品の保存・修復活動を担っており⁵、その修復報告書を一元管理している。今回は試験的な調査として、KUAC に保管されている修復報告書から「1990年代、2000年代、2010年代、2020年代」の、「絵画、彫刻、素描、家具」の修復報告書をサンプルとして取り上げ、報告書の構成、記述内容、記述形式を分析した。

4. 修復報告書の分析

修復報告書の構成は修復工房ごとに異なり、また同じ工房であっても担当者によって差異があった。一方で、記述内容については共通する要素を見出すことができた【表 2】。記述形式についても統一形式は認められないが、1990年代は文章による叙述が多いのに対し、2000年代になると表やチェックリストを用いた事項的な表現が登場する。また、1990年代には、簡潔な内容を手書きで記していた写真キャプションが、2010年代には、技法や素材の説明を交えながら作業工程を説明するものへと拡張する傾向が見られた。

5. 今後の調査

今回の試験調査からは、修復報告書の記述内容

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 修復活動基礎情報: 修復期間、実施者・監修者 2. 作品基礎情報: 作品名、作者、制作年、設置年、寸法、材質・技法、設置場所、所蔵者等の情報 3. 作品詳細情報: 材質、技法、寸法、形状、付属物についての観察調査等に基づく詳細な記述 4. 現状態記録: 調査日、作業者、作品の状態、設置環境 5. 修復方針: 修復の狙い、処置事項 6. 作業内容: 作業工程、使用機材、使用素材、手法 7. 作業後の所見: 修復を経て明らかになったこと 8. 保存・取扱提案: 所蔵者が保存や取扱（運搬・展示等）を行うにあたっての助言 9. 写真: 作品の全体・部分写真、作業工程の写真 |
|---|

表 2

に共通要素が認められる一方で、構成や記述形式には、修復工房や同一工房でも担当者によって大きなバリエーションがあることが明らかになった。このバリエーションは、単なる記述の揺れに由来するだけでなく、修復家が作品とコミュニケーションを取る固有のリズムや手法に由来する可能性もある。そうであるならば、構成や形式の標準化は、現場での作業に影響を与えない、最小限の、あるいは部分的な標準化に留める必要があるだろう。今後は、修復報告書の分析を更に進めるとともに、報告書の使用者と目的を改めて調査し考察することを通じて、部分的な標準化のあり方を模索していきたい。

*本発表は科研費 23K00222 「芸術作品の修復ドキュメンテーション共有化とアーカイヴ構築のための研究」による研究成果の一部である。また第 1 章には、2024 年 11 月に開催された ICOM CIDOC Conference (Amsterdam)にてビデオ発表した内容を含んでいる。

¹ Moore, M. 2001. "Conservation Documentation and the Implications of Digitisation." *Journal of Conservation and Museum Studies* 7 (November):1-19. 修復ドキュメンテーションについては、田口かおり「保存・修復とドキュメンテーション」『アート・ドキュメンテーション研究』20号, 2013年, p. 3-17. に詳しい。

² Roy, A. et. al. 2007. "Conservation Documentation in Digital Form: A Continuing Dialogue about the Issues." *Studies in Conservation* 52 (4): 315-17.

³ 文化庁文化資源活用課「『文化財の匠プロジェクト』の決定について」『月刊文化財』703号, 2022年, p. 49-53. 文化庁事業:「美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業」参照 2024年10月31日. https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/joseishien/bunkagei_jutsu_sinkohi_hojokin/. 田良島哲, 片倉峻平「美術工芸品修理記録のデータベース化」『月刊文化財』722号, 2023年, p. 46-47.

⁴ 宮崎幹子「日本美術院彫刻等修理記録の整理とデータベース構築」『アート・ドキュメンテーション研究』22号, 2015年, p. 15-25.

⁵ 桐島美帆「大学のコレクションをつなぐー慶應義塾の美術品管理運用委員会の取り組み」『三田評論』1254号, 2021年, pp. 42-45.

＜特別企画＞

【座談会】この人に聞きたい——これからのコレクション・マネジメント

博物館法改正をふまえ、コレクション情報のデジタル化推進が学芸員の基幹業務のひとつとなりつつある。

このセッションでは、東京富士美術館の事例を題材に、ミュージアム DXの先駆者たちのコメントを集めるとともに、コレクション・マネジメントについて自由に語り合える場を創っていくことの第一歩としたい。

課題提供・進行：鴨木年泰（東京富士美術館）

コメンテーター：朝倉芽生（高知県立美術館）、中尾智行（文化庁博物館振興室） [50音順]

登壇者プロフィール（敬称略）

鴨木 年泰（かもぎ としやす）

東京富士美術館 学芸課長（学芸員）、全国美術館会議 情報・資料研究部会 幹事、東京造形大学・中央大学 非常勤講師（博物館情報・メディア論）。専門は日本美術史、刀剣、美術情報資料・収蔵品データベース。最近の担当展に、山本作兵衛展（2022年）、源氏物語 THE TALE OF GENJI（2024年）、サムライ・アート展（2024年）など。最近の論文等に「美術館の収蔵作品における情報管理の現場からオンライン・ミュージアムまで」（『東京富士美術館研究誌ミューズ』7、東京富士美術館、2023年3月）、「「デジタルアーカイブ」「ミュージアムDX」のゴールの先にあるもの—ミュージアムの活動領域の拡張を目指して」（アートスケープ <https://artscape.jp/article/9738/>、2024年4月）など。

朝倉 芽生（あさくら めい）

高知県立美術館 石元泰博フォトセンター 学芸員

2018年より現職にて、写真作品約3万5千点を含む石元コレクションの保存管理・調査研究・展覧会企画等に従事。担当展として、「生誕100年 石元泰博写真展」（共同企画、2021年）、「ARTIST FOCUS #03 角田和夫 土佐深夜日記—うつせみ」（2022年）、「Yasuhiro Ishimoto - Des lignes et des corps」（共同企画、ル・バル [パリ]、2024年）など。

<特別企画>【座談会】

中尾 智行（なかお ともゆき）

文化庁博物館振興室 博物館支援調査官

専門は日本考古学と博物館学。河内長野市教育委員会、大阪府文化財センター、鳥取県教育文化財団、神戸女子大学非常勤講師、大阪府立弥生文化博物館総括学芸員を経て 2020 年から現職。多様な現場経験を活かしながら、博物館の持続的な発展を支援していきたい。

主な論著：2021「博物館の北極星」『ミュージアムデータ』84号、丹青研究所、2022「博物館は赤字なのか ～入館料収入をめぐるコストパフォーマンス～」『日本の博物館のこれからIV』山西良平科研報告書、2023「論説 博学連携の展開と新しい学び」『中等教育資料』令和5年7月号、学事出版、2024「博物館 DX の課題と展望」『博物館 DX と次世代考古学』雄山閣

<参考>

田良島哲「行かない／行けない人のためのデジタルミュージアムと、それを支えるデジタルアーカイブ」『artscape：デジタルアーカイブスタディ』2020年7月1日号

https://artscape.jp/study/digital-achive/10162857_1958.html

[大橋正司]「日本の美術館サイトはどうすればもっと良くなるか」note (shosira)、2020年1月19日

<https://note.com/shosira/n/n7b2da70d7973>

■アート・ドキュメンテーション学会とは

アート・ドキュメンテーション学会は、ひろく芸術一般に関する資料を記録・管理・情報化する方法論の研究と、その実践的運用の追究に携わっています。1989年4月に、美術館/博物館、図書館、アーカイブ、芸術関連機関の新しい連携をめざし、わが国および国際間における文化的感性と芸術関連情報の創発的な協働のために開設されました。

さまざまな出来事や資料を記録・共有する作業は社会生活の根本をなす人間の営みですが、その理念や技術は現代の情報社会で急速に変容し、飛躍的に発展しています。芸術関連のドキュメントの持つ豊かな可能性は、研究・教育機関のみならず、地域のコミュニティーや個人的な活動でも開発される局面にあるでしょう。

本学会には、図書館司書、学芸員、アーキヴィスト、情報科学研究者、美術史・文学史・音楽史・メディア史・文化史・自然史研究者など、約300名・機関の正会員、学生会員、賛助会員が所属しています。従来の美術館/博物館・図書館・公文書館・アーカイブおよび学会といった機関や職能を超領域的に融合する新しい学術団体として、本学会は、新しい未知な課題に取り組む方々の参加をえて、活動を展開しています。

本学会は、アート・ドキュメンテーション研究会として創設され、1999年に日本学術会議の第18期登録学術研究団体(情報学・芸術学)に加入後、2005年4月に現在の学会名に改称しました。その後、伝統ある英国美術図書館協会(ARLIS/UK & Ireland)の*Art Libraries Journal*(2013, Vol.38, No.2)の「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号の刊行に協力するなど、国際的視野にもとづいて現代社会の要請する人文学と情報学との連動を追究しています。

主な定期的活動として、年次大会、秋季研究集会、学会誌『アート・ドキュメンテーション研究』と会員ニュース誌『アート・ドキュメンテーション通信』刊行ほか、さまざまな研究集会・見学会、グループ活動、国際交流を実行

しています。学会内の各委員会・グループはつねに、今日的要請に即したデータベースの構築、アーカイブ・デザイン、また個別的な応用課題の解決に取り組み、着実な成果をあげています。

■活動内容

- ・研究会、講演会、見学会の開催
- ・地区部会とSIGの活動

現在、関西地区部会があり、自由に参加できます。

また、日常活動の場として、会員の興味に応じてSIG(スペシャル・インタレスト・グループ)を結成することができます。現在、美術館図書室SIG、デジタルアーカイブサロンSIG、JADS Archives and Archival Methods SIG(学会アーカイブSIG)があり、自由に参加できます。

(地区部会・SIG連絡先:

<http://www.jads.org/contact/contact.htm#sig>)

- ・インターネット・ホームページ(日本語版・英語版)の開設による情報提供・交換及びメーリングリストによる会員交流
 - ・情報・資料の収集・交換・提供
 - ・アート・ドキュメンテーション関係者の交流
 - ・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』、論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』の発行
 - ・『アート・ドキュメンテーション関連文献目録』の作成・維持(上記『研究』並びにHPで提供)
 - ・『アート・ドキュメンテーション関係機関要覧』の作成・維持(HPで提供)
 - ・ドキュメンテーション関係諸機関・組織との幅広い連携
 - ・IFLA(国際図書館連盟)の協会会員として、美術図書館分科会の活動への参加・協力
 - ・ARLIS/UK等各国の同種組織との連携
 - ・国際会議等参加支援のための助成金の支給
- その他、この会の活動に必要な事業を行います。

■会員の特典

- ・本学会の行う研究会・講演会・見学会などの活動に優先的に参加できます。
- ・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』(年3回)、論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』(年1回)の配付を受けられます(賛助会員は各2部送付)。

■年会費〔年度単位〕

会員種別により、以下の会費となります。

- ・正会員 6,000円(ただし、65歳以上は4,000円[自己申告制])
- ・学生会員 4,000円(大学学部、大学院などに在学中の学生。申込時に在学証明書または学生証のコピーを提出していただきます)
- ・賛助会員(個人または機関・団体) 一口以上(一口 30,000円)
- ・団体購読会員 12,000円

■ホームページ

- ・活動の詳細については、ホームページをご参照ください。

<http://www.jads.org/>



■入会方法

- ・HPから「入会申込書」をダウンロードし、必要事項をご記入の上、下記の間合せ先に郵送またはメール添付にてお送りください。役員会にて入会を承認された方に、初年次の年会費の振込用紙を送付します。なお、本学会は会費の入金をもって、入会手続の完了とします。

(入会申込書ダウンロード：

<http://www.jads.org/nyukai/nyukai.html>)



Art Libraries Journal(2013, Vol.38, No.2)

「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号

お問合せ・お申し込み

アート・ドキュメンテーション学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1

パレスサイドビル(株) 毎日学術フォーラム内

Tel : 03-6267-4550 Fax : 03-6267-4555

E-mail : maf-jads@mynavi.jp

2024年6月1日現在

JADS

JAPAN ART DOCUMENTATION SOCIETY

アート・ドキュメンテーション学会

JADS

アート・ドキュメンテーション学会

第17回（2024年度）秋季研究集会 予稿集

発行日：2024年12月1日(日)

編集・発行：アート・ドキュメンテーション学会

<http://www.jads.org/>